

Fellowship ID: P17303

必ずフェローシップ ID を記入することBe sure to enter the Fellowship ID

## Form 7／様式 7

外国人特別研究員作成／By Fellow

2019 (YYYY)	/	8 (MM)	/	24 (DD)
----------------	---	-----------	---	------------

JSPS Fellow's

Signature (Handwritten only) :

## Research Report (by Fellow) (Cover Page)

I hereby submit the research report of my fellowship.

✓ 1. Name (Print) : Aleksandra Natalia Jarosz

✓ 2. Nationality : Polish

✓ 3. Host Institution : University of the Ryukyus

✓ 4. Host Researcher : Shigehisa Karimata

✓ 5. Title of Research in Japan : (英文) Did Proto-Kyushu-Ryukyuan exist? Comparative evidence and attempt at a reconstruction

(和文) 九州琉球祖語の可能性とその再建の試み

✓ 6. Fellowship Tenure : From 2017 / 11 / 25 To 2019 / 08 / 24  
 (YYYY) (MM) (DD) (YYYY) (MM) (DD)

**\*Notes for writing the Research Report**

**\*Type this form except the date and the signature.**

Please prepare your Research Report in English or Japanese within three to ten pages including this page. The contents should include:

✓ 7. Background of Research

申請者は 2015 年に完成した「Nikolay Nevskiy's Miyakoan Dictionary. Reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis」博士論文を契機に、琉球諸語の 1 つで、先島（南琉球）語群を代表する宮古語の記述的、かつ歴史的言語学な研究に目を向いた。

本報告で「日琉語族」と総称する日本列島の言葉を共時的に大きく分かれると、本土語派と琉球語派という 2 つに分類した図が遅くとも東条操 (1953) の方言学的な研究の時代から提唱されており、定説となっている (Pellard · 2015 参照)。一方、歴史言語学な観点からすれば、系統を共通にした言葉の群れとしての日琉語族の存在は疑う余地もないとは言え、その内的な分類、すなわち言葉の分岐やその時間的に最も近い共通の祖先 (いわゆる祖語) といった基準を基礎にした日琉語族の分類にはいまだに検討すべきところが多い。言い換えれば、言葉の共時的、類型論的な類似性を重んじる共通的・言語地理学的な分類と、言葉の系統的な関係、共通の祖語からの分岐を中心とする歴史的な分類とは根本的に異なる概念で、理論上も、方法論上も、2 つを切り離して検討する必要性があると思われる。

このように、検討の余地がある論点としては、九州方言の歴史的な位置づけである。

九州方言は共時的に明らかに本土語派の仲間で、琉球語派と大きく異なるとは言えども、日本本土の中で地理的に最も琉球に近い九州のその言葉は琉球の言葉とより密接な系統的な関係を持っていないのかと疑問に思われるを得ない。10世紀ごろの琉球祖語の担い手であった日琉系の集団の琉球列島への出発点も九州であったことが定説として提唱されている中 (Serafim 2003, Pellard 2015, 狩俣 2018, 2019 など)、すなわち琉球祖語の前段階の言葉が10世紀以前に九州で話されていたことが前提にされている中、果たして琉球の言葉と、少なくとも、九州の一部の言葉が日琉語族の中でより密接につながっていないか、言い換えれば日琉語族の系統樹の中で1つの下位区分を成していないか、と問わざるを得ない。

そこで本研究は以下の2つの仮説を出発点にして研究を行った。

1. 琉球諸語と九州方言が親密な系統関係にあり、九州琉球祖語を設定し、九州方言が持つ他の本土方言との共通性は、琉球諸語が九州琉球祖語から分岐したのち、九州方言が他の本土方言の影響を受けて現在に至った。
2. 九州方言と琉球諸語の類似性は、日琉祖語から琉球諸語が分岐したのち、九州方言からの長期にわたる絶え間ない影響を受けた結果である。

この2つの仮説のどちらの蓋然性が高いかという問い合わせに対する答えを見つけるのが本研究の主な目的であった。さらに、もし仮説1の蓋然性が高いと判断した場合、この九州琉球祖語といった仮の言語の中の単語や文法形式の再建も試みる予定であった。

なお、目的を達成することで、本研究は琉球大学による「琉球列島における『動的』言葉系統樹とヒトの移動」(狩俣繁久代表) や一つ橋大学による「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」(五十嵐陽介代表) のような研究プロジェクトを支える補助的な役割も果たすと期待されていた。

## 8. Research methodology

複数の方法を検討してきた結果、本研究の目的に達する最も効果的、かつ理論上に信頼性のあると思われる方法を選択した。

比較の対象言語を多くの場合、九州方言と南琉球諸語（先島諸語）に絞った。これは沖縄中南部語をはじめ、北琉球諸語は近代歴史上薩摩藩との密接な関係があり、言語接触による類似点も多いと考えられるためである（狩俣 2018, 2019 など参照）。特に南琉球諸語と九州方言にはあるけれども、北琉球諸語には存在していないような特徴はある暫定的な「九琉祖語」に遡れる可能性があると思われた。

比較に際して、トップダウンとボトムアップの2つのアプローチを同時に適用した。トップダウンアプローチとは、辞典類など、すでに存在している該当言語の記録を使い、基礎語彙、文化語彙などにおける南琉球諸語と九州方言の類似性を探すこと意味している。一方、ボトムアップアプローチとは、南琉球諸語の記録・記述がいまだに不十分であるため、それを補うために報告者自身が現地調査を行うこと、さらにその結果に基づき南琉球語群やその下位区分である宮古語、八重山語、与那国語の歴史を解明することである。

南琉球語群の歴史をできる限りで厳密に研究することにより、その通時的な発展を把握することで、九州方言との比較の場合に言語接触や偶然による類似性を系統上の類似性として解釈してしまう、もしくは、反対に一見明らかでないような系統上の類似性を見逃してしまう、などの類の誤解をある程度免れると思われたからである。さらに、日琉祖語までに遡れるような特徴を誤って九琉祖語の特徴と捉えないように、九州地方以外の本土方言や古代日本語とも該当項目を常に確認しながら調査を進めていた。

現地調査の地域に関しては、博士論文執筆の際にも、ニコライ・A・ネフスキイによる大正時代の宮古語資料を研究の中心にしていたため、報告者は研究経験のある宮古語の調査に集中させた。

## 9. Results/impacts

本研究の出発点となった2つの仮説のうち、九琉祖語の存在を提唱する仮説1の方が言語的な事実と一致しており、その可能性が相当高いということが分かった。

Leipzig-Jakarta List という普遍的に置き換え・借用されにくい基礎語彙一覧 Tadmor & Haspelmath 2009 を使用した調査の結果、100項目のうち九州方言と南琉球語が共通にしていると考えられる項目が6つ、そして共通している可能性もあるかもしれないという項目がさらに5つあるという結論に至った。

Leipzig-Jakarta の基礎語彙一覧には入っていないものの、Tadmor & Haspelmath 2009 の研究成果で言えば借用性が低いという項目の中、さらなる数十個の九琉祖語系統の項目が検出された。これらの多くは、「身体」、「感覚・感情」、「自然現象」のような分野出身の単語である。このような基礎語彙における先島諸語との共通点が最も多く見られる九州の地域は鹿児島県の屋久島、種子島、甑島、吐噶喇諸島や大隅諸島のような離島、本土の大隅郡、薩摩郡および鹿児島市、そして宮崎県の諸県地方である。それ以外の地方では、熊本県と大分県でも佐賀県、長崎県と福岡県より共通性がやや多く見られる。

一方、重大な絶滅危機にある来間方言の記録・記述をはじめ、宮古語の記述にも携わっていた。宮古語現地調査で得られたデータを南琉球諸語の比較に活用し、それを南琉球祖語（先島祖語）の音韻や文法、殊に動詞体系の再建の助けにしていた。南琉球祖語の音韻研究では特に狭母音化の様子に、動詞体系では終止的形式に集中し、結果は日本言語学会第158大会やICHL24などにおける研究発表やYearbook of the Poznan Linguistic Meeting, Folia Linguistica Historica,『国際琉球沖縄論集』などにおける論文で報告されている。

特に貴重と思われる発見は、他の琉球語と大きく違い、宮古語来間方言がいまだに系統を異にしている2つの受身・可能接尾辞の区別を保っており、それらは古代日本語のユ形とル形に相当しており、両方とも日琉祖語に遡れる可能性が高いといったところである。

博士論文のために研究していた、非常に貴重なネフスキーの宮古語資料の研究も続けてきた。天理大学附属図書館のネフスキーワークス、大阪大学の石浜文庫などに残っている、これまで知られていなかったネフスキーの資料を閲覧・整理し、それらを徐々に活字化し訳・解説を付けた上で、今後発表していく予定である。

## 参考文献

- 狩俣繁久 2018。「語彙と文法から探る琉球語の南北差と九州からのヒトの移動」。平成30年度琉球大学学長PIプロジェクト「琉球諸語における『動的』言語系統樹システムの構築をめざして」—鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州・沖縄におけるコトバヒト・モノの移動」。鹿児島大学、2018年11月3日。
- 狩俣繁久 2019。「言語接触がもたらした琉球語の南北差」。『方言の研究』5号。日本方言研究会。
- 東条操編 1953。『日本方言学』。東京都：吉川弘文館。
- Jarosz, Aleksandra 2015. *Nikolay Nevskiy's Miyakoan Dictionary: reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis*. 博士論文。Poznan: Faculty of Modern Languages and Literature.
- Pellard, Thomas 2015. "The linguistic archeology of the Ryukyu islands". In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.). *Handbook of the Ryukyuan languages: history, structure, and use*. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. 13–37.
- Serafim, Leon A. 2003. "When and from where did the Japonic language enter the Ryukyus? – A critical comparison of language, archaeology, and history". In: Toshiki Osada and Alexander Vovin (eds.) *Perspectives on the Origins of the Japanese Language*. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies. 463–476.
- Tadmor, Uri and Martin Haspelmath (eds.) 2009. *Loanwords in the world's languages: A comparative handbook*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Note: As much as possible, describe the contents and results of your research in a manner that is easily understandable to a non-specialist in your field. Provide a concrete description if (1) papers related to your work have been published in major academic journals, (2) particularly outstanding research results were achieved, or (3) patent applications have been made or other tangible outcomes achieved through the research.

/ 10. Research Presentations during the period of the fellowship (Name of the conference, title, place, date)

国際沖縄研究所共同研究：島嶼間の言語接触の実態解明に向けての基礎的研究」成果報告及び関連研究発表会 『宮古語における琉球祖語\*u の痕跡』 沖縄県西原町 2018年2月21～22日

第10回 琉球継承言語研究会シンポジウム 『ミャークフツイにおける医療語彙』 沖縄県西原町 2018年3月24～25日

NINJAL International Symposium Approaches to Endangered Languages in Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization *Non-core vocabulary cognates in Ryukyuan and Kyushu* (ポスター発表) 東京都立川市 2018年8月6～8日

48th Poznań Linguistic Meeting (PLM 2018) Initial close vowel assimilation in Miyako-Ryukyuan ポズナニ (ポーランド) 2018年9月13～15日

JAPANologists' Playground 2018 @ Copernicus To celebrate the decennial of Japanese studies in Torun, Japan: Fictions and reality The basics of verbal morphology in Kurima-Miyakoan トルン (ポーランド) 2018年11月29日～12月1日

2018年11月沖縄言語研究センター定例会 『宮古語来間島方言の活用体系 早期報告』 沖縄県西原町 2018年11月10日  
日本言語学会

2019年5月沖縄言語研究センター定例会 『先島祖語における終止的形式 体系的な再建の試み』 沖縄県西原町 2019年5月25日

日本言語学会第158大会 『宮古語来間方言における日琉祖語の痕跡』 東京都国立市 2019年6月22～23日

International Conference on Historical Linguistics (ICHL) 24 *Common Kyushu-Ryukyuan substratum in Kyushu dialects: insights from the Leipzig-Jakarta List* キヤンペラ 2019年7月1～5日

/ 11. A list of paper published during or after the period of the fellowship, and the names of the journals in which they appeared (Please fill in the format below). Attach a copy of each article if available.

Author(s)	Title	Name of Journal	Volume	Page	Date	Note
Aleksandra Jarosz	Ethnolinguistic aspects of Nikolay Nevskiy's research on Miyako-Ryukyuan	Analecta Nipponica	7 (2017) Special Issue: War and Peace. Japan under Emperor Shōwa	87–102	2017	<a href="https://wydawnictwo-japonica.pl/ksiazka/analecta-nipponica-7-2017/">https://wydawnictwo-japonica.pl/ksiazka/analecta-nipponica-7-2017/</a>
Aleksandra Jarosz	Semantic roles prototypically associated with nominative and their overlap with conceptual domains of other cases in	Silva Iaponiarum	LII/LIII/LIV/LV. Special edition: Silva Anniversary: 50 fascicles	94–135	2017/2018	<a href="http://silvajp.home.amu.edu.pl/Silva%2052535455.pdf#page=94">http://silvajp.home.amu.edu.pl/Silva%2052535455.pdf#page=94</a>

	Japonic					
アレクサン ドラ・ヤロ シュ	『宮古方言 ノート』に おける身体 語彙	琉球の方言	42	61–80	2017	<a href="https://hosei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&amp;active_action=repository_view_main_item_detail&amp;item_id=21745&amp;item_no=1&amp;page_id=13&amp;block_id=83">https://hosei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&amp;active_action=repository_view_main_item_detail&amp;item_id=21745&amp;item_no=1&amp;page_id=13&amp;block_id=83</a>
Aleksandra Jarosz	<i>The story of Isamiga: an analysis of a Miyakoan epic song</i>	Borders and beyond. Orient-Occid ent crossings in literature		235–254	2018	論文集
Aleksandra Jarosz	Innovations, distribution gaps and mirror images: the reflexes of Proto-Ryuky uan close vowels in a post-nasal position	Yearbook of the Poznan Linguistic Meeting	4	75–104	2018	<a href="https://content.sciendo.com/view/journals/yplm/4/1/article-p75.xml">https://content.sciendo.com/view/journals/yplm/4/1/article-p75.xml</a>
アレクサン ドラ・ヤロ シュ	『宮古方言 ノート』に おける医療 語彙」	琉球の方言	43	67–84	2018	抜刷参照
Aleksandra Jarosz	Reflexes of Proto-Ryuky uan *i and *u in Miyakoan as a chain shift	Lingua Posnaniensis	61	未詳	2018	2019年後半 発行予定
アレクサン ドラ・ヤロ シュ / Aleksandra Jarosz	宮古語來間 方言におけ る強変化動 詞の終止的 形式	国際琉球沖 縄論集	8	31–44	2019	抜刷参照
Aleksandra Jarosz, Tomasz Wicherkiewi cz	Mikroliteratu ry (マイクロ 文学)	Litteraria Copernicana	2 (30)		2019	特集号共編 <a href="https://apcz.umk.pl/czasopisma/index.php/LC/issue/view/1496/showToc">https://apcz.umk.pl/czasopisma/index.php/LC/issue/view/1496/showToc</a>
Aleksandra Jarosz	Odrodzenie czy narodzenie? Mikroliteratu	Litteraria Copernicana	2 (30)	233–242	2019	学術書籍評 論 <a href="https://apcz.umk.pl">https://apcz.umk.pl</a>

	ry prefektury Okinawa według <i>Shimakutuba</i> <i>Runesansu</i> (『しまく とうばルネ サンス』に おける沖縄 県のマイク ロ文学)					mk.pl/czasop isma/index.p hp/LC/article /view/LC.20 19.032
Aleksandra Jarosz	Fine details of a larger picture: Proto-Sakishi ma *au and *ao diphthongs	Folia Linguistica Historica	38	未詳	2019	2019年後半 発行予定
Aleksandra Jarosz	Non-core vocabulary cognates in Ryukyuan and Kyushu	Asian and African Linguistics	13	未詳	2019	2019年後半 発行予定

/ 12. Awards during the period of the fellowship (Name of the award, Institution, date etc.)

ポーランド共和国文部科学大臣贈呈の優秀若手研究者奨励金 2018-2020